

日本に永住帰国して

石川県 野村 充

私の青春

大正十五年三月五日生まれの私の青春は、戦時中でありました。

男は二十歳になれば、義務徴兵、あるいは義勇軍や予科練、女は従軍看護婦として戦場に向かいました。紺色の帽子をかぶり、看護婦の制服を着た中学時代の友達姿がとてもしりしく見え、本当に羨ましく思えました。戦場へ行く人のために家族たちは、チョッキや腹巻を持って各学校前、デパート、街角に立ち、一人一人の女の人に赤糸で結ぶ、千人針をお願いし、武運長久を祈りました。

金沢駅前の大通りで、私たちは日の丸の小旗を振りながら戦場へ行く兵士を見送り、また出迎えの毎日でした。中には白い布に包まれた四角い木箱の戦死者の

凱旋も、出迎えました。戦争のため、幾人の御主人や息子兄弟姉妹が犠牲になったことでしょうか。

あの時代に歌った軍歌が、今でもしっかり頭にこびりついています。

勝ってくるぞと 勇ましく……（露宮の歌）

若い血潮の予科練の

七つ釦は 桜に鎧……（若鷺の歌）

露の野菊の花ひとつ

戦闘帽子に摘みとりて……（戦場投げぶし）

一生忘れられない、あの菊薫るころにどんな運命が待ち受けていたのでしょうか。

昭和十七年十一月三日明治節（現文化の日）に、私は大連に向かいました。

私の父は昭和七年に、関東州庁に勤務のため大連に渡っておりました。私が生後六カ月のとき、母が亡くなり、その後、私の面倒を見てくれた祖母が十二歳のとき、祖父が十七歳のときに亡くなりました。身寄りがなくなつた私は、父親をたずねるため、渡満し

ました。

昭和十八年四月、南満州瓦斯株式会社に入社し、平凡な生活を送っていましたが、昭和二十年八月、ソ連参戦と日本の終戦を迎えました。

八月十五日正午、社内で終戦のニュースを聞いたとき、私や社員たちは、机・床・柱にしがみついて泣きました。

そうこうしているうちに、大連の市内にもソ連兵がやってきて日本人に対しての暴動が起こり、女は暴行される、物は取られる、街中は何ともいえない有様でした。日本人はこれからどう生きていけばいいのか、皆泣き沈む毎日でした。

もちろん、会社は解散になり、それぞれ家にある物（衣服・家財道具など）を売って生きて行くしかなく、そのころ、女は男装しないと、ソ連兵から「ヤボンスキーマダム、ハラシヨ」（日本人女性きれいだ）と言われ、女性は暴行される恐れがあり、私も男装して会社の皆川さん（男性）と一緒に通勤しましたが、それも十月で終わりました。それまで銀行に預けてあった

お金も戻らず、手元にあるわずかなお金で物売り（餅子・煙草・バター・なつめ）をし、そのころはだれもが、自分自身でしか守ることができない状況でした。

夜寝ていても、いつなん時、ソ連兵がくるか？ かくて眠れない日々が続きました。ある晩、その時がきた。一人の中国人（通訳）が、数人のソ連兵を連れてくる靴音が聞こえ、私たち女性三人は一階に降りず、二回の真つ暗なベランダに隠れました。一人の女性には七カ月の赤ちゃんがいて、泣かさないようにとオッパイを口にくわえさせ、じっとしていると、ソ連兵たちが靴のまま、二階が上がってきました。もう私たちは、見つからないようにと祈りながら、ビクビクしている中、だれかが物に触れたのか「ガチャ」と音がしたとき、私の体は震えだしました。一人のソ連兵がドアを開け、懐中電灯でベランダを照らしたが、人の気配が感じられなかったのか、ドアを閉め各部屋の衣服、貴重品など二時間半ほどかけて盗み、外に止めてあったトラックに運び込んでいたのでした。ソ連兵が帰ったあとの各部屋は、足の踏み場もないほど散らかされ、

残された物は古い物ばかりで、悔しいやら悲しいやら、これから先、売る物がなく、どうして生きていけばよいのだろう、恨み、泣き崩れました。でも反面、幸いにしてソ連兵に見つからなくてよかったと、自分を慰めるしかありませんでした。

女は男装して、しかも四、五人のグループ（男を含む）になって、物を売って生活する道しかありませんでした。皆、引揚げの日を待ちながら生きていくのに必死でした。

私たちも必死になって、毎日売る場所を変えながら、家族がばらばらになって物を売って生活していました。

ある日の午後、突然に引揚げの通知があり、夕方の船に乗らないと帰国できないとのことで、家族は私を探し回ったようだったが見付からず、やむを得ず私を残して着の身着のまま、日本へ引き揚げてしまいました。

残された私は生きるため、それこそ知人のいない異国で、自分の体を守りながら転々と職を探し回り、糧を得て生きてきました。

昭和二十一年、満州人に助けられ、生きるため仕方なしに、結婚しました。二人とも何もなく、掛・敷布団一枚だけの生活でした。

終戦後の中国での生活

そのころの満州国内は、就職困難な時代で、あるときは、二、三カ月間も食物が買えず、せめて長男（七カ月）だけは、飢え死にさせまいと、近所からお米を借りて重湯を食べさせたときもありました。

着る物は、一着だけのチャイナ服で、夏は単ひとえに、秋は裏地を付けてあひらに、冬は綿入れにし、翌日町へ行かなければならないときは、前日に洗って、着ているという毎日でした。

主人の給料だけでは生活できなくて、私も小さい子供を抱えながらアルバイト（星海公園の草むしり）、夜は編物（デパート用）などをして生計をたてました。

中国（満州）での生活は、国内の政治的運動政策が激しく、土地改革・政治改革・経済改革・鎮圧反革命・五反運動・大躍進・自然災害・ソ連還債・四清運動・プロ文化大革命など、中でも私にとって深く印象的な

のは、一九五八年の大躍進運動政策「病人、老人以外の人は働くこと」で、そのときから私は、大連水産養殖廠に、正規社員として勤め始めました。

毛沢東語録によって、私は外国人なので、優先的に幹部内での仕事を与えられました。一九六〇年〜六三年には、ソ連還債のため食糧・副食品・食油・生活用品すべてが、切符制になりました。いくらお金があっても、物は売っていません。お互いにおなかをすいて、ある家では夫婦、親子喧嘩もあり、離婚までして農村に行く人もいました。

そんな状況のなかで、中国政府は私たち外国人に対して、各方面（日常生活・住宅・就職問題など）に、優先的に取り組んでくれました。例えば食糧は、政府の定められた本人の職別によって、米・小麦粉は数キロ、魚は一カ月三キロ、野菜は一日一キロ、食油一カ月五百グラム、布票（服地券）三十一メートルの配給でした。

中国の人たちは、皆やせてがりがりでした。私たちを見て、とてもうらやましがっていました。

自分は「日本人だ」という誇りを持って、感謝の気持ちで病人・老人・仕事に心を捧げて、尽くしてきましたが、そういう時代も束の間、海外関係政策が始まると、私たち家族は、どん底の生活に陥ってしまいました。

一九六六年から七六年までの十年間のプロ文化大革命が始まると、技術者・有能才能者各会社の幹部たち、副首相まで、どれほど多くの人たちが犠牲になられたことか。

言うまでもなく、海外関係の家族にも…。

思想を改造するため、中学・高校・大学の学生たちは「知識青年下郷」という名のもとに農村へ…。もちろん五反レットルを張られた家族も、下放（農村へ）されました。

しかし、私たちは毛主席語録を説明したので、そのようなことはありませんでしたが、子供たちの結婚相手を見つけるのには、苦勞しました。プロ文化大革命に、夫の名譽は回復されましたが、私の四十五歳のときに、夫は亡くなりました。

その後、私は勤務先の推薦により、大連鉄道学院外国語教室に採用されました。私の安い給料で三人の子供を養い、授業のほか每晚師範学校で勉強を習い、一生懸命に頑張ってきました。子供たちはそれぞれ世帯を持ち、また明るい生活に、戻ってきたのです。

一九四九年十月一日の中華人民共和国成立以前は、本当に貧しい国であったが、中国人民は貧しいながらも本心に心が通じ合い、思いやりがありました。

大連での楽しかったことは、その時代では旅行なんでももちろん考えられないし、ただ、私たち残留婦人が、一年に三、四回寄って集まり、お寿司・おはぎ・サラダ・てんぷらなどを作りました。日本の歌を歌うことが、楽しいやら懐かしいやらで、胸がいっぱいになりましたが、それが一番の楽しみでした。

しかし、だんだん皆が帰国されたあとは、本当に寂しくなりました。

私は若いときから、「とにかく子供たちが所帯を持ち、親としての任務を果たせば、帰国できる」という望みを持って、頑張ってきました。

しかし、姉とは十九年間音信不通、皆が次々と帰国される度に、十七歳まで住んでいた金沢の町の様子が目の前に浮かんできました。親戚・先生・友達はどうしているやら、身元保証人がいなくては、帰りたくても帰れません。

昭和三十九年、不安を持ちながら思いきって、県庁援護係に調査を求めました。係の辻さんのご協力で姉の居所がわかり、姉からの返事を受け取ったときは、うれしくて一晩中眠れなく、涙を流しながら、信じられない気持ちで何回も繰り返し、読みました。

それから姉との文通が始まり、援護係の辻さんや、皆様のお陰で昭和五十年四月、三十三年ぶりに、一時帰国を果たすことができました。

金沢での一年間の生活は、学校の先生やお友達のご援助により、同窓会や旅行に連れて行ってくださり、楽しいやら懐かしいやらで胸がいっぱいになりました。また、日本の発展ぶりには驚きました。

最もご協力いただいたのは、小学校時代の同級生の紹介で、オートモ学生服に勤めさせていただいたこと

です。日本語もわからない、しかもミシンなんて踏んだこともない、こんな私を雇ってくださったのです。

従業員の皆さんたちに、親切に教えていただいていたに本当に幸せでした。

ある日、私が便所に入って使用中の鍵をかけるのがわからなくて、そのまま用を足しているとき、突然ドアが開いたので、「誰」と中国語で言ったので、彼女はびっくりして逃げたのです。後で私から「对不起」（すみません）と謝りました。このとき、言葉の通じない不便さがわかりました。

お陰でこの八カ月の間、三種類のミシンを踏むことができ、また、たくさんのおみやげも買え、本当に助かりました。一年間の滞在期間も終わり、名残惜しくはありましたが、子供たちが待っている中国へ戻りました。

帰国後日本での生活の厳しさ

中国に戻って通勤しながら、毎日毎日、日本への永住帰国の心が強まり、どうしても我が故郷の土に、骨を埋めたい一心で、永住帰国の決心をし、昭和五十七

年四月、就職は必ずできると確信を持って、帰国しました。だが、五十七歳は定年ごろであって、どこにも就職のあてはなく、某社に清掃員として一年間勤務しましたが、私の体では勤めることは無理でした。「もう諦めて、中国へ戻ろうか」と考えているとき、日本国際貿易促進協会北陸支局の故A事務局長が、勤務先はまだ足を運んでくださり、私に幸運を与えてくださいました。

昭和五十八年八月から、日本国際貿易促進協会に勤めることになりました。入社前の面接で、中国からの貿易関係の資料翻訳をするようにと言われました。自分は自信满满で、間違いがないと思って翻訳したのですが、金沢で一流の通訳・翻訳者に見ていただき、四、五カ所を赤鉛筆で直されガツカリ…。「訳した意味はあってるが、ただ日本語がうまく使えていない。もっと勉強すれば上手になる」と言われました。

入社してから一番困ったことは、電話の受付で、相手の言葉がはっきり聞き取れず、早口のように感じてメモするのも間に合わず、いつも電話が鳴ると、何

を言ってくるのかと、胸がドキドキする毎日でした。

自分としては早く正しい日本語をと思い、各種の辞典、ローマ字、専門用語を勉強し、また、テープで聞く私の発音が聞きにくいので、民謡を習って少しでも発音が自然に、やわらかく聞こえるように努力してきました。

しかし、翻訳・通訳に使われている間は忘れないが、しばらく使わないと、特に新しい専門用語（年を取ってから覚えた言葉）は忘れてしまいます。それにしても、日本語は本当に難しい言葉だと、つくづく思いました。

外国人にとっては、日本語の難しさは、助詞のつけ方や敬語の使い方です。それにあいまいな言葉が多く、翻訳・通訳する人には困ることがあります。また、ただ頭に覚えるだけでなく、よく口を動かしてしゃべることです。耳を慣らすことも大事だと思いました。

人の運命とは不思議なもので、このことが後に私の生き方に影響を与えることになろうとは…。

平成六年に長女家族三人、次男家族三人、計六人が

帰国したとき、三年間いろいろな問題にぶつかり、例えば、言葉が通じないこと思想の違い、生活環境の違い、国の政策、社会制度などについて誤解しないように、よく説明してやらないと、日本での生活には、なかなかなじむことはできません。この三年間、この無口な私でも、口からあわが出るほど聞かせてやりましたが、当時は納得しませんでした。しかし年数が経つにつれ、自然に分かってきました。

今では、私の言ったことが役に立って、皆それぞれ各職場で頑張っております。

私も帰国して、はや十三年になりますが、今だに物の考え方、人との付き合いの難しさ、話をしてもらえない声で、しかもアクセント（中国式）が固く、まるで怒っているように聞こえるそうで、しゃべり方をもっとやさしく自然にと努力しておりますが…。

現在こうしていて現役でいられることは、石川県厚生援護係の方や、皆様のご指導・ご援助のお陰と、ありがたく感謝いたし、これからも頑張っていきたいと思っております。

日本が、このような豊かで平和な国になったのは、今まで日本人の方々が、様々なご苦労を乗り越え、努力された結果であります。もう二度と戦争を起こさないように、中年の方々、若い青年たちは、もっと戦争のことについて理解しなければならぬと思います。

終戦後、もう五十年になりましたが、今だに、戦争のためにどれだけの残留孤児・残留婦人たちが、異国に残っておりますことか。だれも、我が故郷を思わない人は、いないでしょう。次の歌は心に残る歌です。

へ誰か故郷を想わざる

花摘む野辺に 日は落ちて

みんなで 肩をくみながら

唄をうたった 帰りみち

幼馴染みのあの友 この友

ああ 誰か故郷を想わざる

終戦後、家族がばらばらになって、金もない家もない、生きていく道もない状況の中で、中国の人たちは、自分の生活さえ困り果てているなか、かつての敵国の子供、婦人たちであるにもかかわらず、助けて養って

くれたことには、感謝しております。

テレビで放送された、「大地の子・乳泉村」は、あの当時の実状であります。中年の方々、若い青年たちも見ていただき、戦争のためにどれだけの人が犠牲になられたか、理解していただきたいものです。私も放映されたとき、涙なくしては見られませんでした。

戦争を知らない人たちに、戦争の事実を知っていただき、いつまでも日本の国が豊かで平和な国であるように、努力し続けることを祈っております。

【執筆者の横顔】

野村充さんは大正十五年金沢市で生まれました。六カ月のとき生母が亡くなられ、当時、県庁に勤めていた父親と祖父父母に育てられた。

父親は昭和七年、充さんが六歳のとき、充さんとお姉さんを残して満州の大連市へ転職された。

その後、十二歳のときに祖母、十七歳のときには祖父が亡くなったので、昭和十七年十一月、父の住む大連に行き、十八年四月から南満州瓦斯株式会社に勤め

られたのである。

昭和二十年八月十五日終戦となり、十月には会社もついに解散となり、まもなく大連市へソ連兵がきて、日本人の家財道具を略奪しはじめ、婦女子には暴行すると言う生きた心地のしない混乱状態になっていた。

父親は後妻をもらい、子供がひとりできていたので、充さんは会社の寮に住んでいたのであるが、二十年末のある日、突然、日本人は夕方の船で日本への引揚げ命令が出され、家族の者との連絡もとれず父親たちは、充さんを残して引き揚げられた。

残された充さんは知人のいない異国で、自分の身を守るため必死になって働いた。

そのうち一人の中国人に助けられ、生きるため、昭和二十一年二月結婚された。三人の子供にも恵まれていたが、充さんが四十五歳のとき御主人が亡くなり、三人の子供を抱え苦労は絶えなかった。

望郷の念がかない昭和五十年一時帰国ができたが、先に帰国した父母はこの世にはおらず、故郷の土に骨を埋めたい一心で、昭和五十七年永住帰国をし、長女

一家、次男一家、長男一家を呼び寄せ、全家族そろっても種々の問題で苦労が続いているが、安住することができたと言っておられます。

(石川県引揚者更生同盟

会長 久木 孝作)

北満捕虜收容所逃亡記

石川県 川端 善一

昭和二十年六月、北満にも遅い春が訪れ、道端にも小さな花が咲き始めたころ、人々は、半年間の閉じ込められた生活から解放されて、伸び伸びとした生活に戻れるのである。街に沿って流れる松花江を渡り、中ノ島に遊びに行く人が多くなる季節でもあった。ラジオからは毎日のように、激戦や玉砕のニュースが、『海行かば』の音楽とともに流れていたが、北満ではそれほど緊迫した様子もなく、平穏な日々が続き配給品などにも変わりはなかった。しかし、早朝に行う軍